



## 市民活動の新たな挑戦

いろいろな悩みや不安、難題を抱える人たちを支え、問題解決に積極的に取り組む市民活動は各地ですそ野を広げている。ファイザー製薬ではヘルスケアの分野の市民活動を支援し、その社会的認知を高めることを目的に、2000年から助成プログラムをスタートさせた。過去の実績にとらわれずに、活動のユニークさと将来性に評価の重点を置いているのが特徴。2001年度の助成対象となった各プロジェクト(左頁参照)を中心に、9回連続(今回は3回目)でレポートする。



毎週主に金曜日と第一日曜日、入院や施設に入所している野宿経験者を定期的に見舞い、健康状態や病院、施設での状況を確認(写真上)。「家族らしい交わりの時間を少しでももちたい」と始めた生活相談。毎週金曜日、一緒に食事をしたり、カウンセリングを行い、一人ひとりそれぞれの状況に応じた健康管理や生活サポートに取り組んでいる(写真右)



# 人を人として野宿生活者と共に 生きる喜びを分かち合うケア活動

## 木曜夜まわり会の「孝ヶ崎地域における終わりになき」生活支援事業(大阪府)

「野宿生活者たちのことを知れば知るほど、このプロジェクトに関わっていきたくて思うようになりました」

大阪のJ-R環状線「新今宮」駅南側一帯にある孝ヶ崎地域(あいりん地区)で、野宿生活者の生活相談と支援活動を行っている「木曜夜まわりの会」。

公務員として働かたわら、6年前からボランティアで参加している高塚晃弘(32)さんだ。実は、高塚さんは貧困や病気で見捨てられた人たちの救済活動に一生を捧げたマザー・テレサに会ったことがある。その時の「日本は豊かな国なのに、なぜ路上生活者を放っておくのでしょうか」という彼女の言葉



入院や施設入所後のフォローや、居宅生活をしている人たちの継続的なケア活動を行うために必要な資料もしっかり管理されている。

に心を動かされて、「木曜夜まわりの会」の活動に参加したのだという。

会の前身は、路上で飢えや寒さをしのいでいる人たちがいるのを見かねて、自主的に集まった人たちが始めた「夜まわり」。本格的に組織されたのが14、5年前になるという。当時は、毎週木曜日の夜10時半ぐらいに集まって、野宿生活者を訪ね歩きながら、毛布やおにぎりなどを配布。からだの調子が悪い人には診療所や病院で無料で診療が受けられる医療券の配布や入院、宿泊施設の確保などを進めていた。しかし、週1回の夜まわりだけでは、病院や施設に行っても、その先どうなったかを誰も見届けることができない。相談する相手も少なく、退院、退所をして行方が分からな



左から、生活相談を行っている高塚さん、青山さん、小川さん。家族的な関わり合いを大切にしているメンバーたちだ

現在、毎週金曜日に、野宿に至った経緯や健康状態を把握し、生活保護申請の手伝いや病院や施設に入っている人たちを定期的に見舞ったりと、家族的な関わり合いのなかでの生活相談・訪問ケア事業を行っている。

支援メンバーの青山美香(33)さんと小川裕子(29)さんは、口をそろえる。

「この地域はもともと日雇い労働者が多く、高齢のため働けなくなると野宿生活を始めたという人がほとんどです。身寄りもなく、孤独のうちに亡くなる方も少なくありません。私たちは、路上で出会った人たちと一緒に生きる喜びを分かち合いたい」

# 自分たちでつくる「給食」から、 さまざまなことを学ぶフリースクール

## 神戸フリースクール不登校の子供たちの健康と体力づくりを考える(兵庫県)

輸入雑貨屋と見まがうような、カラフルな軒先。その2階の広間では、子供たちがそれぞれ好きなように過ごしている。スタッフと勉強をしている子、対照的にゲームに没頭している子。かと思えば、静かに本を読んでいる子もいる。